

司会の言葉

小 山 省 三*

昭和大学麻酔科，細山田明義教授と若手研究者のシンポジウムの司会をさせていただきました。循環生理学そのものが一応，臨床の現場に根付いて来たとともに，受容体に関する概念や E-C coupling に関する知見，機械的変換に関する知見などを理解しながら，新規な分子レベルでの対応が求められてきています。

聖マリアンナ医大：鮫島先生等の“AT レベル単一負荷における呼吸循環動態の検討”は古くて新しい応用生理学の主題でもあり，細胞代謝レベルでの成績と生体との応答性に関してさらに新しい測定パラメーターの開発などが期待される点であります。

群馬県立循環器病センター：磯部先生等の“PTCA 時の局所心機能障害—心電図 ST 上昇との関連”では PTCA 時の ST 変動を計測し，0.2 mV 以上の上昇例には壁仕事量の低下を伴うことが指摘されました。この ST 電位増加分の 0.2 mV が critical voltage であるか否かは今後の多数例の集積を望みたいところであります。

独協医大越谷病院心臓血管外科：村井先生による“開心術における triiodothyronine 投与の心筋代謝に及ぼす影響”では心筋機能保存に関する甲状腺ホルモンの可能性が示唆されたもので，核内受容体系ホルモン作用として広く細胞分子レベルまでの検討が進められることを期待したいものであります。

防衛医大麻酔科：高松先生による“血管収縮及

び弛緩反応に及ぼす加齢の影響の検討”では内皮機能と NO との関係を加齢状態での差異を検討したものであり，未だ不明の部分が多い課題であります。in vivo のモデルと in vitro のモデルを適切に用いた研究の発展を期待するものであります。

京大麻酔科：北村先生による“イソフルランはカルシウム拮抗薬抵抗性チャネルからのカルシウム流入を増加させる”では，イソフルランの E-C coupling における血管平滑筋のチャネル機構変動を細胞内 Ca^{++} 濃度を測定して電位依存性に対する受容体依存性の役割を示したものであり，細胞内信号伝達に関する麻酔薬の一斑を示したものである可能性もあります。現在競争の激しい分野でもあります。今後の発展を期待するものであります。

また，九州大麻酔科：山浦先生等による“プロポフォールはチアミラルより前負荷，後負荷を低下させる”では麻酔導入時におけるプロポフォールの効果を示したことは意義のある臨床データであり，これらの成績は実験的に検討すべき循環生理の理論的なアイデアを誘発する可能性をもったものであります。

総じて若手研究者による研究発表の内容また整理の質は極めて高くなり今後の発展が十分期待されることに関しては，参加者一同が同じような感想を持たれたと思われれます。今後はオリジナル性が高くかつ独創的な研究成果が，本学会からも発掘されることが望まれるところであります。

*信州大学医学部第二生理学